

「両親に挨拶ができてよかった」

小脇にブーツを抱えて弘樹の部屋に入ったイーザンは、「懐かしい。何も変わっていない」と呟いて、ドア横の新聞紙の上にブーツを置いた。

激しい揺れだったが、周囲に何も置いていなかったベッドは無事だった。逆に机や本棚周りを見るも無惨な状態に鳴っている。片付けるのに一苦労だ。

「よく覚えてたな、その場所」

「ブーツはここだと、俺がこの部屋に来るたびに怒っていたじゃないか」

イーザンはマントを脱いでベッドに放り、続けて深紅のジャケットのボタンも外す。

「ちょっと待ってくれ。イーザンに合う服を捜さないと……。ジーンズ……なんて穿きたくないよな。締め付けられるもんな。ジャージ……は、王子様には絶対に穿かせられないっ！としますと……」

弘樹は、イーザンの美形度が落ちないよう、クローゼットを開けて必死で考えたが、本人はどうでもいらしく、弘樹に両腕を絡ませてきた。

「別に、今すぐ服を着なくてもいい」

「イーザン」

「抱き締めて口づけするだけでは……もはや足りないのだ」

後ろから抱き締められ、耳元で甘く囁かれた弘樹は、かくんと膝から力が抜けた。

「それ……いきなり……だから……」

「弘樹をもっと味わいたい」

「清くなくなったら、俺はルマルシャンに戻れなくなるんだぞっ！」

「安心してくれ。そこまでは……って、弘樹っ！」

「イーザンは突然弘樹の体を抱き上げ、ベッドに座らせる。」

「どうしたんだ……？　イーザン。俺何か悪いことでも言ったか？　気に障ったらごめん」

「違っっ！」

イーザンは床に膝をつき、弘樹の右手を自分の両手でしっかりと握りしめた。まるで「口ポースだ。」

「え……？」

「もう一度……ちゃんと俺の目を見て言ってくれ」

「何を？　シャージは絶対に穿かせないってっ！」

「もっとあとの台詞」

イーザンは期待に満ちた目で弘樹を見上げる。是非とも期待に応えたい目だ。

弘樹は自分の放った言葉をいくつかたぐり寄せ、「あ」と小さな声を上げた。見当がついた。

「もしかして……ルマルシャンに戻れないって……台詞か？」

「その通りだ。よくぞ……覚悟を決めてくれた。こんなに早く聞けるとは思わなかった」

「イーザン」

弘樹は、自分の右手を握りしめるイーザンの両手に左手を重ねる。二人の掌は、優しい思いが詰まったぬくもりに包まれた。

「俺は……ずいぶん前から決めていた。ただ、言い出せなかった」

ルマルシャンで暮らすことを選べば、家族と生まれ育った場所、自分と繋がりがあったすべての人たちと別れなければならない。二度と会うことは叶わないのだ。

だから口にしてしまうのが怖かった。イーザンが優しいから、何も言わずにずるずる引き伸ばした。

けれど。

「なあイーザン。俺はあのとき。敵兵がクラレンスたちに襲いかかったとき……逃げて隠れていてはダメなんだと分かった。ここで暮らしていくのなら、闘って自分の命を守る」とが大事なんだと分かった」

イーザンは何も言わず、弘樹の呟きを黙って聞いている。

弘樹はイーザンの手を強く握りしめて、言葉を続けた。

「イーザン……俺、人を殺した。命あるものには決して弓を向けるなと言われたのに、射

殺した。傷つけた。そうしなければ、仲間が死んでいた。自分も死んでいたかもしれない。それでなくとも酷い傷を負っていただろう。なあイーザン……闘うって辛くて苦しいな。でもルマルシャンは……それが普通なんだよな？」

弘樹の声が震える。イーザンの手を握りしめている手も震えていた。

あのと一言えなかったことを、今ここで言う。

弘樹はイーザンを見つめ、再び口を開いた。

「俺はこの世界で……もう弓は引けない。俺の弓はルマルシャンにある」

「弘樹はいつも……俺のために命ある者に弓矢を向ける。申し訳ない。俺がお前に……覚悟を急がせた。手を汚させた。大事な宝客に、こんなことはさせたくなかった」

「そんなこと……ない」

弘樹は思い出す。

生まれて初めて弓矢を向けた相手は、アレックスサンドロ。コンポステーラのモノ・カステラン。丸腰のイーザンに剣を向けた。

二度目はアドナイの兵士。イーザンの友人であるクラレンスに襲いかかるうとしたところを、射貫いた。

確かにある意味ではイーザンのためだ。だが、と弘樹は思う。

「イーザン。誰のためでもなく、きつと俺自身のためだ。俺がルマルシャンで暮らしてい

くための……。でも、人殺しは辛いなあ。敵だからってだけで殺すのは辛いなあ。それが当然でも……ごめん、俺はきつと甘い。ルマルシャンで生きて行くには甘い。……だからイーザン」

弘樹は俯き、顔を伏せた。

「何があっても、俺と共に」

「俺……矢が人間に刺さったときの音が……耳にこびりついている」

「その心地悪さを忘れるな。何もかもなかったことにはできない。自分の行いを決して忘れず、生きていく。俺もだよ弘樹。戦で人を殺した。殺せと命令もした」

「イーザン……」

姉に話して少しは楽になったが、苦しくて辛い思いは伝えきれない。

「イーザン、俺は……」

「最初は誰でもそうなる。弘樹は宝客であると同時に、リュセクターンの兵士だ。苦しんだろうが慣れる。そして生きてくれ」

イーザンが、囁くように言った。

弘樹は頷いた。とてもきこちなくて人形のような感じだったが、しっかりと頷いた。

「一緒に、生きる。同じ世界で……一緒に」

「ああ」

イーザンはふわりと微笑み、項垂れたままの弘樹の頭に、自分の額を押しつける。

「でも……家族にどうやって納得してもらえばいいんだろう」  
 「何も言わずに、フランシスを連れてイーザンと一緒にルマルシャンへ戻ることも出来るが、それをしてしまったら一生後悔することも分かっていた。」

異世界、異邦人、幻影……家族は今、これらを辛うじて許容している状態なのに、そこへ弘樹が「異世界で生きていきます」と言ったら、確実に大反対されるだろう。

しかし弘樹は自分がすでにこの世界の住人でないことを分かっている。

あのとき。あの場所で、人に向けて矢を放った瞬間に、新たな道が開かれた。

「努力しよう、弘樹。私とて……この世界に来るまで毎日毎日、父上に懇願した」  
 弘樹はゆっくりと顔を上げる。

「そつだよな。イーザンはリユセクターを継ぐ王子だ。ちゃんと王様に伺いを立てて、了解をもらわないとだめだよな……。戦の処理もあるし……」

「いや、その……」

「まさか……何も言わずに?」

弘樹は目を見開き、頬を引きつらせた。

イーザンは肩を竦めたため息をつく。

「十日も……だ。十日も毎日通って『宝客殿のところへ行かせてください』と懇願したの

に、だっ！ 父上は首を縦に振らなかった。周りにいる連中も、諦めろと言っ顔で俺を見た」

「イーザン」

「アランティスがな、王に対する義理は立ったから好きにすればいいと言ってくれた。だから俺は……」

確かにイーザンは、文字通り「世界を股にかけて」の逢瀬をしていたときは、誰かに断りを入れることはなかった。だが今回は状況が違う。

「イーザン、あのな……」

「いいんだ。俺はちゃんとリユセクターに戻るのだから。リユセクターの宝客と次代の律主を連れて戻る」

イーザンはそつ言っって、両手で弘樹の頬をそつと包み込んだ。

「うん。その前に俺は……家族に話す。わかってもえなくても、何度でも」

「俺を悪役にすればいい。……このまま攫ってやつてもいいんだが」

「バカ。何もかも中途半端にできないだろ」

あとのこと何も考えなくていいなら、うん……攫ってほしい。

弘樹は小さく笑う。

イーザンの顔が近づく。弘樹は目を閉じた。唇が触れ合う。

それだけでなく、弘樹は口づけをされながらベッドに押し倒された。

「イーザン……っ」

「触れたい」

イーザンの低く甘い声が心地いい。Ｔシャツの上から体を撫でられて気持ちがいい。

「また……昼間……っ……」

それに、一階には家族もいる。

弘樹はイーザンの指に反応しつつ、「だめだ」と首を左右に振った。

「大丈夫。触れるだけだ。弘樹は清いままでいられる」

「そうじゃなく……っ……ん、ん……っ」

イーザンの指がＴシャツの中に入り、直に弘樹の肌に触れる。

好き勝手に動き回って、触れた場所から体を熱くした。

Ｔシャツを胸までたくし上げられ、淡い色の突起を唇と指先で愛撫される。

弘樹は、イーザンが触れているというだけで息が上がった。

「ほら、こっちにも触れるぞ」

「あ……っ……今は……だめだ……っ」

イーザンの器用な指が、ジーンズのフロントボタンを外し、ファスナーを下ろす。

「だめ……だ……っ」

「弘樹の口が素直じゃないのは知ってる」

「ま、待って……っ」

弘樹は腰を振って逃げようとしたが、この手の事に関してはイーザンの方が一枚も二枚も上手だった。

あっという間にジーンズと下着を脱がされた弘樹は、頬を真っ赤に染めながら、イーザンの喉を鳴らす音を聞いた。

「口づけだけで……もう達しそうになっているよ、弘樹……。相変わらず、いやらしくて可愛いな」

ドアに鍵はかかかっていないし、二階とはいえカーテンは開きっぱなし。地震のせいで混沌とした部屋の中、弘樹はイーザンの下で敏感な裸体を晒す。

「恥ずかしいから……そんなにまじまじと見るな」

「どうして？ 俺の口づけに感じてくれてる証拠だ。……もっと触れてもいいっ」

「この状態で「もっと触れる」となると、我慢できなくなる。」

「あ……っ」

イーザンの青い瞳が、欲望で潤んでいる。彼の、どこまでも触れたいという思いが肌を伝わり、弘樹の体と心を柔らかく熱していく。

「俺を……こんなふうにしたのは……イーザン、なんだから……っ」

弘樹は体のこわばりを解き、イーザンが触れやすいようにぎこちなく両足を広げた。興奮して欲望を露わにした下肢が、さらけ出された。

髪と同じ色の柔らかな体毛、時折震えながら硬く勃起している雄、興奮して持ち上がった袋が、イーザンに視察される。

明るい日差しの下ですること自体に抵抗があるのに、イーザンが見ているだけというのにも違和感があった。

弘樹は、だんだんもどかしくなる。

「イーザン……なあ……」

「ん？」

「見てるだけじゃなくて……っ」

自分の寝起きする部屋で、それ以上のことを口にするのは妙に生々しい。

弘樹は唇を噛みしめて、「分かっているくせに」と悪態をつく。

「焦らすつもりはないんだ。ただ……あの戦いのあとだったから、弘樹が傷を負っていたらどうしようと思って、確認をしていた」

「見ているだけか？ 確認なら……こんなふうに足を持ち上げるとか、背中も見るとかすんだろっ」

弘樹は唇を尖らせて起き上がると、自分で片足を持ち上げたり、四つん這いになって腰

を突き出すようなポーズを取った。

「弘樹……」

「なんだよ。傷はどこにもないぞ」

「俺を挑発してどうする。ルマルシャンに戻らない気か？」

「えっ？」

「そんな恰好をされると、何もかも許された気分になる」

イーザンはすっと目を細め、弘樹の腕を掴んで引き寄せる。